

# 世界的視野からの哲学史

ラインハルト・コゼレック企画

期間 2019年4月1日から 2024年3月31

日協力 ドイツ研究基金(DFG)

企画代表: ロルフ・エルバーフェルト (教授)

ホームページ (ドイツ語) <https://www.uni-hildesheim.de/histories-of-philosophy/>

ホームページ (英語) <https://www.uni-hildesheim.de/en/histories-of-philosophy/>

現在グローバル化は私達の日常だけでなく、歴史全体の捉え方そのものに新しい影響をもたらしている。人文学においても、あらゆる研究やテーマの視野をグローバル化が反映したものになるようにと必然的に期待されるようになって来た。私達の過去、現在、未来という概念を世界的な地平から再検討、再構築しなおす必要性が事実あるといえる。

(Mersmann/Kippenberg 2016)

人文学において、ここ20年以来例えば歴史学における世界を枠とした歴史の新しい捉え方や研究方法などに見られるよう、過去をグローバルな観点から新しく再検討し直し、世界の歴史を「絡み合った歴史」として再構築する試みが増えて来ている (Reinhard 2016, Osterhammel 2009, Conrad 2013 参照)。この新しい試みは過去から現在をより効果的に理解する手段であるばかりでなく、「絡み合った歴史」としての未来を考える基盤となるのである。哲学と哲学史においては、残念ながらそのような立場からの研究は極めて少なく、これからの研究の発展が期待されなければならない。それは今回2018年に北京で行われた「世界哲学会議」において英語、フランス語、ドイツ語、ロシア語、アラビア語、中国語が正式な言語として登録されていた事から見ても明らかである。今回の世界哲学会議の観点においては学術的な視野は20世紀以降すでに明らかに世界的になって来ている、と言える。しかしこのようなグローバルな展開は哲学内での歴史の研究には反映されているとは言えない。私達のプロジェクトはそれ故これからの哲学史をグローバル化した視点から新構築していく事にある。哲学すること自体世界的なオープンな立場から行われていけるよう考え直していくことが課題である。それには様々な分野の研究についての再検討が必要とされる。問題の捉え方と分析、新しいパラダイグマや研究手段の検討、それによる以前見られなかったような新しい研究内容、それらがもたらす研究学団や大学、研究所などへの影響、などあらゆる面での再検討が行われなくてはならない。このプロジェクトではしたがって以下の10点の分析と研究に焦点を当てていきたい。

1. 18世紀後半から欧州哲学の中で構成され現在まで継承されている「正式な哲学イコール欧州哲学」という枠組みとそれに基づいた排他的な哲学の定義の分析批判。
2. インド学、中国学、日本学、アラビア学、ユダヤ学など、19世紀以降ヨーロッパで定着した言語学の分野と共同に哲学史を研究。
3. 従来の欧州的な哲学史のみでなく、日本語、中国語、アラビア語圏などヨーロッパ外で形成された哲学史の研究。
4. 翻訳問題や受継のパターンに注目した哲学史の分析から「絡みあった歴史」としての哲学史の構成。
5. これまでの哲学史の中でグローバルな要素を含むものを見出し、それらからグローバルな地平線のもとに作られた哲学史の新たな説話の構成に向けての探究。
6. 哲学の分類方法として民族、国、宗教、大陸、西洋、東洋、時代、言語、文化、ジェンダー、等のパラダイムから哲学史を系譜的に分析する事と、体系化への試み。
7. 20世紀以来の世界中のあらゆる大学やアカデミアにおける哲学科の形成パターンの調査分析と、教授法や研究にどのような影響があるのかの分析。
8. 哲学の制度化や地域学会および「世界哲学会議」のような世界レベルでの学会の分析を通してグローバルな哲学の方法の研究。
9. 世界のあらゆる地域のグローバル化されたいと思われる哲学科の自己表示、およびカリキュラムや教授法において「哲学史」にはどのような要素が含まれ教えられているかの調査を通し、哲学史において何が主流化されているのかの分析と研究。
10. 哲学のグローバル化により発生する哲学用語や概念自体の変化の研究。

**1. 18世紀後半から欧州哲学の中で構成され現在まで継承されている「正式な哲学イコール欧州哲学」という枠組みとそれに基づいた排他的な哲学の定義の分析批判。**

18世紀、19世紀、20世紀にわたりヨーロッパで発祥し定着した哲学史を、それがどのように非ヨーロッパの哲学を取り入れたり排他したりしたか、という観点から調査する。ヤコブ・ブルッカーのドイツ語の哲学史には「ヘブライ人、カルデア人、ペルシャ人、アラブ人、サバア人および、フェニキア人、エジプト人、ムーア人、リビア人、ケルト人、ゲルマン民族、そしてローマ、シシアン、ゲーテ、トラキア人、またギリシャ、ユダヤ、中国、日本、の哲学」が含まれているのに対し（Brucker 1731-36, Vol. 1）、アルバート・シュヴェーグラーの著名な『哲学史』（Schwegler 1848, 17版1950）では、哲学史はヨーロッパの古代、ヘーゲルまでの近世のみが含まれており、「哲学史」という枠から非ヨーロッパの哲学は排除された。シュヴェーグラーはその上、宗教に関する哲学も除外した。フランツ・ヴィマーによると、シュヴェーグラーの観点は非常に「近世ヨーロッパ質的」（Wimmer 2017）であり、哲学というものはソクラテス以前の哲学から新プラトン派のヨーロッパ古代の哲学と、ブルーノからヘーゲルといった近世哲学のみであると定義されて

いる。18世紀から20世紀のヨーロッパにおける哲学史とは、それぞれこの両極の間に位置づけられると言える。これまでのPark 2013、Schneider 1990、Wimmer 1990、等の研究に基づき、18、19、20世紀ヨーロッパにおいてどのような論議や表象手段により非ヨーロッパ哲学ばかりでなく、現在はヨーロッパ哲学史の重要な一部であるとされているアラブ、イスラム、ユダヤ哲学も当時疎外されたのかについての研究が必要である。アラブおよびユダヤ哲学排他はルネサンスまで遡る問題なので (Hasse 2016) その時代まで遡る分析も必要である。

## 2. インド学、中国学、日本学、アラビア学、ユダヤ学など、19世紀以降ヨーロッパで定着した言語学の分野と共同に哲学史を研究。

哲学の分野において非ヨーロッパの哲学が「正式な哲学」から除外されたと同時に、ヨーロッパでは当時インド学、シナ学、日本学、アラブ学、ユダヤ学、などが発祥した。これらの分野ではまず各言語において、古典的な言語学（ギリシャ語、ラテン語）に基づきまず古典を読む、という手段で研究が進められた。そのような古典には宗教的、哲学的要素が多く含まれている。したがって、ヨーロッパにおいては、インド哲学、中国哲学、仏教哲学、アラブ哲学、ユダヤ哲学の哲学史は哲学以外の分野で研究された、という事である。このような経過により、ヨーロッパでは二つまったく別々の流れで哲学史が研究されてきた、という驚くべき事実があるのである。19世紀以降、一方ではヨーロッパの哲学史は、少数の例外を除きヨーロッパでの哲学史のみが「哲学史」とされ、その中でさらに様々に細かく分岐されて行き、もう一方ではインド学、シナ学、ユダヤ学、アラブ学、仏教哲学においてそれらの哲学史が十分に伝統と言えるほど研究されて来たが、それらは哲学の分野からはほぼ認識されていない。ヨーロッパにおける後者の各哲学史の発祥と発展は、これからの哲学的な動機と表象手段を考えるために分析されなくてはならない。そのような研究は今後のグローバルな観点からの哲学史を考える場合に重要な示唆を提供するであろう。

## 3. 従来の欧州的な哲学史のみでなく、日本語、中国語、アラビア語圏などヨーロッパ外で形成された哲学史の研究。

特に20世紀に入って、インド、中国、日本、アラブ諸国など、様々な文化圏のその地域の言語で哲学史が研究されるようになった。それらはヨーロッパでは自立した「哲学史」として注目された事はほぼなかった。例えば、スレンドラナト・ダスグプタ (Surendranath Dasgupta 1887–1952) のインド哲学、ユーラン・フェン (Youlan Feng 1895–1990) の中国哲学、中村一 (1912–1999) の日本思想史、マジド・ファキリ (Majid Fakhry 1923–) のイスラム哲学等はすべてそれぞれの哲学史のアウトラインを提供している。注目に値する点としてあげられるのは、中国語の哲学史は無論中国思想の根源 (紀元前10–6世紀) から始まるのに対し、日

本では哲学という分野がヨーロッパ哲学として輸入されたのが1868年以降であるゆえ、それ以後初めて検討されたヨーロッパ的な哲学史が哲学史として成立している。それゆえ、それ以前の伝統は「思想史」と区別されている。インド哲学は明らかにリグ・ヴェーダ（紀元前10世紀）から始まるが、「哲学史」は現在も含み植民地時代以来のインド人エリートの共通語である英語で書かれて来た。

しかし20世紀に入り哲学史は様々な言語で書かれるようになり、他文化の文献も再注目される意義がある。アラビア語では10世紀から哲学史的なものが書かれていた記録もあり、中国語ではすでに荘子（紀元前4世紀）などに見られるように、少数の中国哲学の記録が残っている。仏教でも同じ事が言える。日本語の場合は複雑で、20世紀に入ってからには主に西洋哲学史が主流に書かれたが、中国思想史、仏教思想史、インド哲学史も同時に書かれている。この傾向は近代中国思想史にもみられる。欧州の哲学圏ではこれらについての研究は極めてまだ少なく、まず様々な言語から哲学史に関する資料を収集する必要がある、それに基づいて体系化を進める。

#### 4. 翻訳問題や受継のパターンに注目した哲学史の分析から「絡みあった歴史」としての哲学史の構成。

グローバルな視点から捉えた哲学史では、「絡み合った歴史」という観念に基づいて哲学の根源まで遡る必要がある、「根源」という概念も再検討しなおす必要がある。ここ30年にわたり新たに捉えられてきた歴史の「絡み合い」や「関連性」という捉え方により、私達の歴史の理解そのものが変わって来たからである。哲学史の研究も、従来の「国単位」に作り上げられた歴史から、絡み合い、関連性を重視した歴史構成に焦点が移っている。そして世界的な関連性を背景とした現在の立場から改めて古代史も再検討されている。

従来の枠組みはこうして放棄され、視点は人類の歴史の始まりから世界的に絡み合っている歴史とされた観点へと移り変わっている。一例として、ジョンソン（Johnson 2012）によるオックスフォードハンドブックの『古代後期』という編集書においては古代後期にはヨーロッパのみではなく、アフリカと中国も含まれている。同様に、ギリシャからインド、インドから中国、ペルシャからスペイン、アフリカからヨーロッパ、そして中国からヨーロッパ、と言った様な「絡み合った空間」としての哲学史の構成も必要である。ホーレンシュタインの

『哲学のアトラス』（Holenstein 2004）とエルバーフェルトの『絡み合った思想史』

（Elberfeld 2017b）はこのような見解から哲学史をとらえて行く重要な手がかりとなる。

#### 5. これまでの哲学史の中でグローバルな要素を含むものを見出し、それらからグローバルな地平線のもとに作られた「哲学史の新たな説話」の構成に向けての探究。

世界的な規模での哲学史作成のプロジェクトを始めるに当たり、従来の固定化された概念や枠組みを改めて検討し直す必要がある。グローバルな哲学史は20世紀以降いくつかの例はあるが（Wundt 1909、Jaspers 1957、Schilling 1964）、特にそれに焦点を当てたものはイ

ンドで1963年から1989年まで5巻にわたりジョン・プロット (John Plott 1990年没) によって発行された『世界的な哲学史』(Global History of Philosophy) というタイトルのほぼ知られていない著書以外存在しない。プロットはヨーロッパとアジアのみに注目したが、独自の時代区分を作成し、以下のような中国とインドに関する章を設けた。枢軸時代 (第一巻、1963)、全ヘレニズムとバクトリア時代 (第二巻、1979)、パトリスティック経典時代 (第三巻、1980)、スコラ学時代、一 (第四巻、1984)、スコラ時代、二 (第五巻、1989)、である。このプロジェクトはしかし未完成に終わる。ここで疑問に上がるのは、世界各地域全般に当てはまる統一された時代区分が適切なのか、全く別の次回区分の方法を考えるべきか、という問題である。

その他の例としては1989年から1998年にかけてユネスコにより企画されたフランス語の「ユニバーサル哲学事典」(Encyclopédie Philosophique Universelle) がある。これは広い範囲と意味で哲学自体をグローバルな枠組みから捉えなおす試みである。1990年代以降は英語圏でいくつかの著書が出版された。ソロモン編集の*From Africa to Zen. An Invitation to World Philosophy* (Solomon, ed., 1993)、クーパー *World Philosophies. An Historical Introduction* (Cooper, 1996) ドイツ *Introduction to World Philosophies* (Deutsch, 1997)、ドイツ、ボンテコー編 *A Companion to World Philosophies* (Deutsch/Bontekoe, eds. 1997)、シャーフシュタイン *A Comparative History of World Philosophy. From the Upanishads to Kant* (Scharfstein, 1998)、スマート *World Philosophies* (Smart, 1998)、ガーフィールド *The Oxford Handbook of World Philosophy* (Garfield/Edelglass, eds, 2011)、があげられる。これらは英語圏ではここ25年間で哲学のグローバル化が起きている事を示している。このうち一部は非ヨーロッパが焦点とされているのに対し、他ではヨーロッパ哲学も比較として取り入れられている。しかし内容の選択は、著者や編者の専門分野に大きく左右されていると言え、それらの分野における選択方法や方針などにより何がどう理由で選択され、他が却下され、それらにより哲学という分野全体にどのように影響を及ぼすのかの研究も必要となる。

世界哲学という枠においても一つ重要な発展として、2018年以来インターネットで活動が始まったハーゲンルーバーとワイトによる「女性哲学者による概念事典」(Hagenruber, Waithe, *Encyclopedia of Concise Concepts by Women Philosophers*) があげられる。

(<https://historyofwomenphilosophers.org/ecc/#hwps>) このプロジェクトの目的は歴史上すべての女性哲学者を探し出し、彼女達が哲学に及ぼした貢献を記録してゆく事である。編集者は世界中のあらゆる地域から女性哲学者を見つけ出す事の重要性を強調している。これまで無視されていた女性哲学者からの様々な貢献を含む事により、絡み合った哲学史はより充実したものになる。

ここでもう一つ注目したいのはエルマー・ホーレンシュタインの *Philosophy Atlas. Places and Ways of Thought* (Holenstein, *Philosophie-Atlas. Orte und Wege des Denkens*, 2004) である。ここでは地図とテキストにより世界哲学史の説明が行われ、場所の関連関係が分かる。世界哲学史作成への理論としては、フランツ・マルティン・ヴィマーの斬新な研究があげられる。間文化哲学を扱う学術誌ポリログ (Polylog. Zeitschrift für interkulturelles Philosophieren) において

ヴィマーは理論的な基盤から世界哲学史についてのいくつかの面について論考を発表している (Wimmer 1990)。それと関連して、エルバーフェルトの2017年の著書、グローバルな観点からの哲学史 *Historiography of Philosophy from a Global Perspective (Philosophiegeschichte in globaler Perspektive, Elberfeld 2017a)* も現在までの研究や発展をまとめているという点でこれからの研究基盤になるであろう。

6. 哲学の分類方法として民族、国、宗教、大陸、西洋、東洋、時代、言語、文化、ジェンダー、等のパラダイムから哲学史を系譜的に分析する事と、体系化への試み。

18世紀、19世紀においては哲学はギリシャ人、ゲルマン民族、フランス人、等いわゆる民族を軸に体系化されたが (Brucker 1731–36)、20世紀に入り各地での国家の成立と共に国家ベースの体系化も進んだ。例えば、サントフォスの哲学史 (Sandvoss, *History of Philosophy, Geschichte der Philosophie*, 1989) では、ヨーロッパではイギリス、フランス、ドイツ、イタリアの他オランダ、ベルギー、オーストリア、スイス、スペイン、デンマーク、ノルウェー、スウェーデン、フィンランド、ポーランド、チェコスロバキア、東ドイツ、ユーゴスラビア、ブルガリア、等の国で哲学がどのように展開されたかが紹介されている。この書にはその上アメリカ、インド、日本の他メキシコ、アルゼンチン、ウルグアイ、ペルー、ボリビア、オーストラリア、韓国、イスラエル、チベット、イスラム諸国、東南アジア、アフリカ、等の国と地域 (最後の三点) における紹介も含まれている。これらの体系化の動機や方法論も研究のテーマとなる。

民族と国家の他、キリスト教、仏教、ユダヤ教、イスラム、等の宗教も哲学史の体系化には影響している。その点も別の研究事項とされる。

ここで、これらの従来の体系化のカテゴリーではなく、今までと全く違う区分方法で哲学史を捉えることが可能かも検討される。例えば、言語別に、中国語、アラビア語、イタリア語、日本語、英語における哲学、というような区別基準を使用する事は可能であるか。自然言語にはそれ自体にすでに現実を区別するカテゴリーとパターンが内在しており、それらにより「世界観」が抽出される。そしてそれらの言語が混じり合う場合、世界観も常に流動的にいくつもの可能性を含めたものになって行くのである。ラテン語は、ギリシャ語からの翻訳として哲学媒介の言語となった。中国仏教はインドのある地域の思想を訳したことから始まった。このように、翻訳のプロセスは哲学の可能性を言語的に広げ、それにより新しい哲学的アプローチが見い出されるのである。現在例えばアフリカの場合、哲学分野ではヨーロッパ言語が支配的であり、英語圏、フランス語圏、ポルトガル語圏、と区別されるのは無論植民地時代の影響が残っているからである。この場合、国家という枠は全く使用されず、アフリカ哲学、という大陸の名称か、上記の植民地時代の言語別か、自国語およびヨルーバ、イグボ、バントゥ、などの言語グループの思想、という区別が使用される。一概にはまだ言語による哲学史の体系化の研究はこれからの課題だといえる。

## 7. 20世紀以来の世界中のあらゆる大学やアカデミアにおける哲学科の形成パターンの調査分析と、教授法や研究にどのような影響があるのかの分析。

14世紀以降のヨーロッパ文化の拡張により、ヨーロッパ式の大学制度の基礎は、1538年セント・ドミンゴ、1553年メキシコ、1595年フィリピン、1622年チリのサンティアゴ、等世界中に見られる。19世紀終わりには近世ヨーロッパ式の大学が日本（1877年に東京）、中国（1898年に北京）、インド（1922年にデリー）に創設された。20世紀以降、ヨーロッパ式の大学制度と科学はアフリカ、アジア、南米、オーストラリア、そして独自の大学の伝統が定着していたイスラム圏へと広がった。イスラム圏の伝統的な大学としてはチュニスのエズ・ジトウナ大学（737）、モロッコ、フェズのカラウィーイーーン大学（859）、カイロのアル・アズハル寺院（975年）があげられる。

新たに創設された大学はヨーロッパの大学の支部か（ロンドン大学等）、すべてヨーロッパ式であり、ヨーロッパのカリキュラムに基づいて各分野は教えられた。無論哲学も例外ではなく、ヨーロッパ以外の大学でヨーロッパ哲学のみが教えられる、という現象が世界各地で現在まで続いている。これはまさに世界哲学の歴史は、欧米哲学が正式な哲学のパラダイグマであるとされ、それが制度的に世界中に定着し、それ故世界中で何代にもわたり哲学者はあたかも欧米哲学のみが哲学であると教授され続けられた、という点で同時に暴力の歴史であるとも言える。今日この歴史は「認識、認知における暴力」として批判され研究されている（Santos 2016）。このように制度化の過程とそれにより影響される哲学の定義、哲学史への影響も批判的に研究されなくてはならない。

## 8. 哲学の制度化や地域学会および「世界哲学会議」のような世界レベルでの学会の分析を通してグローバルな哲学の方法の研究。

このような制度的傾向を修正するものとして、世界レベルの学会があげられる。1900年に始まった世界哲学会議、1913年からの世界美学会議、1919年創立の全アフリカ会議、1939年以来ハワイで行われてきた東西哲学者学会等である。1900年以来これらは哲学の国際化、地平の拡張に貢献してきた。

世界哲学会議は、インド、中国、日本、ラテンアメリカ諸国、アフリカ諸国、その他の地域からの哲学がそれぞれ国際的に哲学分野で認識される場となった。しかし世界哲学会議においても、現在の地理的、思想的な領域が含まれたのは1980年以来である。このように、国際会議の歴史自体を分析する事は、非ヨーロッパ哲学がどのように世界哲学に統合されてきたか、そして世界各国、各地域での連絡や関連の強化を通してどのように出版物に変化が及ぼされたか、などを知るための研究に役立つ。今日我々は急速な国際化の接点にいる。しかし哲学という分野内でそれがどのように影響してきているのか、それが今後の哲学にどのような変化をもたらすか、等の研究はまだわずか初歩の段階だと言える。

9. 世界のあらゆる地域のグローバル化されたいと思われる哲学科の自己表示、およびカリキュラムや教授法において「哲学史」にはどのような要素が含まれ教えられているかの調査を通し、哲学史において何が主流化されているのかの分析と研究。

世界哲学とは何か、を表すには、従来の概念を超え、いかなる「哲学史」が世界各地の哲学科でどのように教えられているかを調査する必要がある。哲学史を教える、という事は同時に何を「規範」として哲学史とするか、という問題であり、「規範」とは何か、というテーマと関連している。現在の科学全般の規範はほぼ完全に欧米の規範であり、何をどういう理由で規範とするか、という点に関して議論されるようになった。脱植民地化が進み、欧米の知識の正当化が疑問化され、今まで疎外されていた非欧米の伝統の知識や哲学の認識が重要視されて来るようになった。しかし哲学史の規範においてはいまだに非欧米の伝統や女性哲学者からの貢献はほぼ反映されていない。欧米中心の支配的な知識構造による哲学史の規範は欧米以外の地域の哲学科のカリキュラムにも反映している。調査の第一ステップとして、まず世界各地から哲学史では何が規範として教えられているかを把握する。インターネットの普及によりこの調査は以前よりも簡単に行う事ができる。ここでは主に欧米中心的な哲学史を超えた世界的な要素を含むカリキュラムを世界各地から探し出しデータを集める事から始める。第二ステップでは、収集されたデータは教育や研究の傾向を把握するために分析される。同時に、研究提携関係を築く基盤ともなる。第三のステップでは、世界各地ですでに世界的な規範を採用している哲学科が一見できるようインタラクティブな地図を制作する。そして世界哲学の規範とはどのようなものであるべきか、というテーマに関して国際的なワークショップを開催し、世界各地の参加者と共同に検討していく。

10. 哲学のグローバル化により発生する哲学用語や概念自体の変化の研究。

最終的には「哲学」という言葉の意味自体再検討されるべきであろう。例えば、口伝の哲学や思想の重要性、哲学と「叡智」や「知恵」との関連、バントゥ哲学、インカ哲学、のような「民族哲学」的な思想はどのように世界哲学史に編み込まれて行くのか、等は哲学自体の意味を揺るがす問題である。ヨーロッパ内でも「哲学」が何を意味するのか、は一定していたわけではない (Elberfeld 2006)。この問題は哲学史が世界哲学史となるにあたり再検討される必要がある。100年以上にわたり、「哲学」という言葉は世界各地で様々な言語に適用され使われて来た上、例えば日本語や中国語においてもその言葉を使って哲学史が語られて来た。したがって現在「哲学」という言葉は世界的視線から改めて見直されるべきである。

このプロジェクトは2019年4月1日から2024年4月1日までの5年間、ヒルデスハイム大学のロルフ・エルバーフェルト教授の監視のもとに行われる。研究の焦点は以下のテーマである。

- 様々な言語における哲学史と、存在する世界哲学史に関するデータベースを作る。
- 世界哲学史を扱うカリキュラムのあるすべての世界各地の哲学科を地図で示す。

- 世界哲学史のアウトラインと方法についての著書を出版する。これは哲学一般教養や入門の教材に使えるような内容にする。グローバルな視点への長期に渡っての養育は学科の最初から始まるべきである。
- 上記の10点においての様々な専門研究はそれぞれ学術誌論文や著書として出版される。

## 文献

- Brucker, Johann Jacob: *Kurze Fragen aus der philosophischen Historie vom Anfang der Welt bis auf die Geburt Christi, mit ausführlichen Anmerkungen erläutert*, 7 Vol., Ulm 1731-36.
- Conrad, Sebastian: *Globalgeschichte. Eine Einführung*, München 2013.
- Cooper, David E.: *World Philosophies. An Historical Introduction*, Oxford 1996.
- Dasgupta, Surendranath: *A History of Indian Philosophy*, 5 Vol., Cambridge 1922.
- Deutsch, Eliot (ed.): *Introduction to world philosophies*, New York 1997.
- Deutsch, Eliot / Ronald Bontekoe (eds.): *A companion to world philosophies*, Malden Mass. 1997.
- Elberfeld (2017 a), Rolf (ed.): *Philosophiegeschichtsschreibung in globaler Perspektive*, Hamburg 2017.
- Elberfeld (2017 b), Rolf: *Philosophieren in einer globalisierten Welt. Wege zu einer transformativen Phänomenologie*, Freiburg i. B. 2017. Elberfeld, Rolf: *Was ist Philosophie? Programmatische Texte von Platon bis Derrida*, Stuttgart 2006.
- Fakhry, Majid: *A History of Islamic Philosophy*, New York, 1970.
- Feng, Youlan (馮友蘭): *Zhongguo zhhexueshi (中国哲学史 Geschichte der chinesischen Philosophie)*, Vol. 1, Shanghai 1931, Vol. 2, Shanghai 1934.
- Garfield, Jay L. / Edelglass, William (eds.): *The Oxford Handbook of World Philosophy*, Oxford 2011.
- Hasse, Dag: *Success and Suppression. Arabic Sciences and Philosophy in the Renaissance*, Harvard University Press 2016.
- Holenstein, Elmar: *Philosophie-Atlas. Orte und Wege des Denkens*, Zürich 2004.
- Jacob, André (ed.): *Encyclopédie philosophique universelle*, UNESCO, 4 Vol., Paris 1989–1998.
- Jaspers, Karl: *Die großen Philosophen*, München 1957.
- Johnson, Scott Fitzgerald (ed.): *The Oxford Handbook of Late Antiquity*, Oxford University Press 2012.
- Mersmann, Birgit / Kippenberg, Hans G. (ed.): *The Humanities between Global Integration and Cultural Diversity*, Berlin 2016.
- Nakamura, Hajime: *A History of the Development of Japanese Thought, A.D. 592–1868*, 2 Vol., Tōkyō 1969.
- Nakamura, Hajime: *Parallel developments. A comparative history of ideas*, Tōkyō 1975.
- Osterhammel, Jürgen: *Die Verwandlung der Welt. Eine Geschichte des 19. Jahrhunderts*, München 2009.
- Park, Peter K.J.: *Africa, Asia, and the history of philosophy: racism in the formation of the philosophical canon, 1780–1830*. Albany 2013.
- Plott, John C.: *Global History of Philosophy*, Vol. 1-5, New Delhi 1963–89.
- Reinhard, Wolfgang: *Die Unterwerfung der Welt. Globalgeschichte der europäischen Expansion 1415–2015*, München 2016.
- Sandvoss, Ernst R.: *Geschichte der Philosophie*, 2 Vol., München 1989.
- De Sousa Santos, Boaventura: *Epistemologies of the South. Justice Against Epistemicide*. London: Routledge 2016.
- Scharfstein, Ben-Ami: *A comparative history of world philosophy. From the Upanishads to Kant*, Albany 1998.
- Schneider, Johannes Ulrich: *Die Vergangenheit des Geistes: eine Archäologie der Philosophiegeschichte*. Frankfurt am Main 1990.
- Schilling, Kurt: *Weltgeschichte der Philosophie*, Berlin 1964.

- Schwegler, Albert: *Geschichte der Philosophie im Umriß. Ein Leitfaden zur Uebersicht*, Stuttgart 1848, 17th ed. 1950.
- Smart, Ninian: *World philosophies*, London 1998.
- Solomon, Robert C.: *From Africa to Zen. An Invitation to World Philosophy*, Lanham 1993.
- Wimmer, Franz Martin: *Interkulturelle Philosophie. Geschichte und Theorie*, Wien 1990.
- Wimmer, Franz Martin: „Philosophiehistorie in interkultureller Orientierung“, in: *Polylog. Zeitschrift für interkulturelles Philosophieren* 3 (1999), 8–20.
- Wimmer, Franz Martin: „Unterwegs zum euräqualistischen Paradigma der Philosophiegeschichte im 18. Jahrhundert. Barbaren, Exoten und das chinesische Ärgernis“, in: *Philosophiegeschichtsschreibung in globaler Perspektive*, R. Elberfeld (ed.), Hamburg 2017, 167–194.
- Wundt, Wilhelm (ed.): *Allgemeine Geschichte der Philosophie*, Berlin und Leipzig 1909, 2nd. ed. 1923.